

山崎 智著

『白き貝殻——日本海軍歯科医科士官の歴史』

これは日本の海軍歯科軍医制度（陸軍では歯科医将校、海軍では歯科医科士官）の歴史について書かれた貴重な本である。というのもこの制度は正式には昭和十六年に始まって昭和二十年に終わっているから、医学史から見るとほんの束の間の出来事に過ぎないことであったが、一方これには「軍医と歯科軍医—医科と歯科—の関係」が凝縮されているのでここに一つの意味がある。また軍医制は敗戦を挟んだ混乱の中で終始しているから、それらについての資料等も散逸したものが多く、後世になつては追及することは極めて困難だと考えられる。

著者は丁度昭和十九年九月に歯科医専を卒業して短期現役という制度によつて、海軍歯科医少尉として服務してこの制度に触れ、軍医と歯科軍医の関係について深く考えるところがあり、併せて太平洋戦争で戦死をとげた多くの先輩、同僚への鎮魂の思いを込めて、歯科軍医の流れを突き止めたというところから、困難なこの資料集めを始めてこれを書き上げたのである。

振り返ると日本で形の整った所謂西洋医学教育が始まったのは、幕府がオランダから来て貰ったあの軍医のボンベが文久元年に長崎でユトレヒトの軍医学校をなぞって始めた医学傳習所であった。この時にはカリキュラムの中に物理、化学

なども加えさらに、ベッドサイドティーチングまでもするつもりで一二〇ベッドの療養所も付けられていたのであった。また東大医学部のルートとなった明治六年の大学東校では最初の教師はプロシアから派遣された陸軍と海軍の軍医のミュルレルとホフマンであったという具合で日本の医学教育のルートには軍医が深く関わっていた。

また徴兵制度が始まったのは明治六年であったが、これは医師免許制度の始まる前であったが、すでに軍医が検査に当たっている。徴兵検査では口腔検査も軍医が行っていて、しかもその検査で不合格になった者もあつたのであった。

軍医制は医学教育、医療制度にとつても先駆的な位置を占めていたこういう流れであつたから、それらより大分遅れて形が整つてきた歯科医制度の上に立つた歯科軍医の道は苦渋に満ちていたが、著者は海軍軍医制を縦糸に、歯科の流れや軍医制の流れを横糸にして、一・草創期、二・明治時代、三・大正時代、四・軍縮時代、五・無条約時代、六・創設の動向、七・制度の創設、八・太平洋戦争、九・終戦と制度の分析という九の区分に分けて、それぞれよく調べ上げた資料を基にして記している。

そしてこれを書く著者の歯科医療、歯科医学への熱い眼差しが医学史や歯科医学史にとつては小さなトピックスに過ぎないように思われる「歯科軍医制」の歴史になにかを感じさせるものを与えている。とくに巻末に添えられた歯科医科士官並びに嘱託歯科医名簿は多少とも関わりをもつ人にとつて

は他では得がたい資料として感動を与えらると思う。

(榊原悠紀田郎)

〔東京都世田谷区北沢一―二―一六、平成十六年四月十日、A  
五判、三一六頁、非売品〕

松木 明知 著

『華岡青洲と「乳巖治療録」』

かねてから華岡青洲先生研究者である松木明知先生が、華岡青洲の最大の事業である世界で最初に全身麻酔下乳巖の手術をされてから記念すべき二〇〇年後の今回、その「乳巖治療録」を上梓されたことは真に意義のあることと思います。

先生には各種文献をもとに和洲五条駅の藍屋かん(六〇歳)の乳巖手術を敢行された事実を詳細に述べられて乳巖手術の図式を掲載されて判明しやすくなりました。又それ以後の手術例なども研究されて明確にされたことは青洲の乳巖外科手術を知る上で大いに役立つものと思います。

尚、巻末には文献が数多く判明しやすく列記されていることは青洲研究者にとって今後大いに役立つものと思います。先生のご労作に対して心から敬意を表します。

所で、私は五代目ですが、初代の岩瀬敬介は額田郡高須邑より文政十二年八月春林軒に入門し、六十九歳晩年の青洲先生に師事して四年間の後免許皆伝となり帰郷し現在の岡崎市

福岡町にて開業しました。

帰郷に際し敬介は七十一歳の時、青洲先生寿像や先生の数多くの伝書及び二巻の秘伝図を持ち帰りました。伝書は青洲先生の秘伝講義録ともいうべきものでその内容については、青洲先生医談、青林軒膏方便覧、東郭先生医談華岡先生評、吉益丸散方、丸散方考、撮要方(二巻)、外科處方録、青囊秘録、丸散録(完)、南涯先生青洲先生險証百門等、婦人良方、産科瑣言(全)、燈火医談(全)、華家門人姓名録、治痘要方、瘡科瑣言(全)、等であります。

又、秘伝の巻き物は二巻であり一つは整骨巻木綿の秘事であり、もう一つは外科の秘事であり、外科の秘事の一部は前半が欠落しており、よって青洲を有名にした乳巖の手術の図式は入っておりません。

吳秀三先生の華岡青洲及其外科の乳巖姓名録によればその手術例は敬介の入門した一八二九年では三例であったが翌年翌々年には各二例あり、帰郷の天保三年には一例も記載されておりません。松木先生の乳巖治療録によれば一八〇四年から一八〇八年の五年間では一六件で、一八〇九年から一八一三年の五年間では四三件と非常に多くなっていると述べられております。

敬介の春林軒入門中の日記によれば、某日、晴、青洲先生と吉野川に鮎釣りに行き帰宅後、舞妓を呼んで大いに楽しんであります。よって青洲先生もご壮健の様子であります。それにもかかわらず、晩年になって手術例が壮年期に比較し